

---

# IS 永音さんは苦勞して

ネコ削ぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 永音さんは苦勞して

### 【Nコード】

NO563BA

### 【作者名】

ネコ削ぎ

### 【あらすじ】

世界で男性初のIS操縦者『織斑』は強く、優しく、人に好かれている。そんな天才的な彼の周りで起こる様々な話。

……ではなくてですね。そんな『織斑』さんにある種の感情を抱いている少女の物語ですよ。

タイトル変更しました。

## 1話（前書き）

懲りずに新作をババンと出します。箸休め程度に読んでいただければ良いなと思います。

## 1話

「目覚めるのだ、勇者よ」

何か声が聞こえてくる。

「勇者よ。早く目覚めるのだ」

脳が始動していき、段々と活性化していく。

「世界を救うのだ。魔王の手から」

ゆっくりと眼を開ける。

視界に映りこんでくるのは白い無機質な天井。  
毎日見ている天井だから、今更何かを言うこともないんだけど。  
ベッドの上で仰向けに寝ている体の内、首だけを横に向ける。

「目覚めたか、勇者よ」

「……………」

目の前に顔がある。それも見知った男の顔。  
それを見た瞬間に始動しきった脳が停止する。

「……………!?!?」

再始動と共にその顔に拳を叩き込む。それはもう容赦などせずに。

「何をしているのかを教えて欲しいんだがね？」

女子の部屋の床を痛みのためにゴロゴロ転がる変態男に質問をする。質問の答えによってはもう一回叩き込むことを決心して。

「う、くう。……痛いぞ」

知らないよ、そんなの。

アンタの痛みについての感想が聞きたい訳じゃないんだから。

「良いから答えなよ」

「よ、良からう。答えてしんぜよう」

がばつと起き上がる笹萩代一ささはしかしろが偉そうでムカつく。実際に偉いから諦めるしかないけど。

「何をしているかと言われればこう答える。キミの寝顔を見に来たと」

……爽やかな笑顔で何を言うかと思えば、とつてもくだらないなあ。ベッドから降りて、部屋の片隅にある机に向かう。

机の上に無造作に置いてあるボールペンを握り締める。カチッとボールペンの先端を飛び出させる。

「一杯死ねえ！」

寝起きながらも全力でボールペンを突き出す。手加減する訳にはいかないなあ。

「馬鹿！ 死亡回数に限度があるのを学べ！」

「学んだ上でのことだから気にするな！」

「ボールペンは筆記用具だぞ！」

「知ってる！」

第三者の介入によって終わりを迎えたボールペンの狂乱（代一命名）の後、私達は代一の妹笹萩弥子（やし）の用意した朝食に手をつけている最中だ。

「今日はIS学園に入学する日なんですから、やんちゃしないでくださいな、兄上」

「いやいや、先に手を出したのはアッチなんだけど」

「女性の部屋に侵入して寝顔を見る人が悪いと思うけど」

「それはどう考えてみても兄上に非があります」

「敵ばっかりだな」

当たり前だ、女の敵め。

それにしても味噌汁が美味しいな。私もこのレベルまで到達できれば良いんだけど。なかなか上手くはいかない。

もちろん、味噌汁以外にも美味しい。

IS学園は全寮制だから弥子に料理を教わることが出来なくなるな。

「ところで、IS学園にあの『織斑』も入学するみたいだよ」

代一の言葉を聞くと、全ての動作が止まる。

「織斑も？」

チャンスかも知れない。今から行くIS学園にあの『織斑』を潰せる機会があるのだから。

「あら？ 『織斑』と聞いただけで凄く酷い顔になってしまったわね」

鏡がないから分からないけど、そんなに酷い顔しているのか、私は？ すぐに何時もの表情に戻さなくちゃいけないな。

「酷く可愛い顔ね」

何だよ、酷く可愛い顔って？ 恍惚の表情で私を見ないで、弥子。ニヤニヤと苛立たしい表情をしている代一は後で刺す。

## 2話

「永音とね続流つゆりゅう。趣味は腕前はともかく料理だよ。一心専用機持ちだけど、あくまで試験運用を任されているだけだからあんまり期待しないでくれな」

教壇からの教師の視線を受けながら初めて出会うクラスメイト達への自己紹介。相手が私に興味あるかは知らないけれど。

パパパつと言う事を言って席に着く。後は傍観に徹すればいいので気が楽。

一年一組という枠組みに入れられたんだけどまさか『織斑』も同じクラスだとはね。自身の運の良さに感謝したいよ。……神？ 誰それすごいのか？

織斑おりむら千夏せんかと今すぐ向かい合いたいくらいだ。自重するけどさ。

それにしても、織斑おりむらって双子だったんだな。

織斑おりむら一夏いちかね。あの織斑の双子の弟。

二人とも似てないね。二卵性双生児なんだろうな。

千夏の方はとつても美形。それに対して一夏は……うん、まあ悪くないんじゃないかな？

クラス中の視線を集める千夏を見れば一夏がそこそこだっというの  
が分かる。

何か、クラスにアイドル的な存在がいるのもどうかと思う。

……例えば織斑おりむら千冬ちふゆとか。

「まったく私のクラスは馬鹿ばかりが集まるな」



下の方の弟に出席簿を振り下ろした千冬がクラスの反応へ最初に放った言葉だ。私も彼女の言葉に同感だけどね。整備士の怒声には慣れているんだけど、女性特有の甲高い声はあんまり慣れない。

此処はイベント会場じゃないんだから、動作の一挙一動に反応するなよな。

もう無視して居眠りしたいんだけどさ、きっと千冬にはバレるな。授業中の居眠りがスリル満点なんて学園生活に必要ないんじゃないのか？

一時間目は難なく終了した。もうあっさりと終わった。

初めての授業だが皆が予習してきている事が前提なので簡単な専門用語でいちいち時間を取られることがなかった。

アレだな。ちゃんと予習していないと頭が真っ白になっちゃうな…  
…アイツみたいに。

視線を前方の一点に向ければ机に突っ伏す織斑一夏がいる。分かりやすいくらいの力尽きたのをアピールしてくれている。

親愛なるお兄様に助けてもらえば、と思って織斑一夏がいる方向に目を向けるとポニーテールの女生徒と廊下へ行くのが見えた。

やっぱり天才さんは違うね。弟さんとは本当に違うみたいだわな。ああも早く、女子と仲良くなれるとはね。教室の外にも女子が沢山見に来ているし。

帰って次の授業準備をしなよ。時間なくなるよ。

ほら見る。言ってるそばからチャイムが鳴ったぞ。

二時間目。山田真耶<sup>やまたまや</sup>先生の授業時間だ。

スラスラと読み進めていく山田先生に余裕でついていける私。教科書に書いてある事が苦もなく理解出来る。最初見た時は地球外の書物かと錯覚したというのに。頑張ればちゃんと理解出来るんだな。

周りをキョロキョロしたり、意味もなく教科書をパラパラめくったり。集中力が早くも底を尽きたのか、一夏。

兄の方は余裕って感じだな。

「織斑くん。何処か分からないところがありますか？ 私は先生ですからちゃんと答えますよ」

あんなに集団から遺脱した行動を続けていたら気づかれるよな。気づかれてしまったんだから、観念して恥を忍んで山田先生を頼るんだな。

「先生！」

「何でしょうか、織斑くん」

多く人が居る中で無知を晒すのは辛いだろうが、今聞かないと後に何かしらのかたちで後悔するんだ。お前の決断は間違いじゃないぞ。

「ほとんど全部分かりません」

……決断だけは間違いじゃないぞ。決断だけは。

「へ!？」

山田先生が間の抜けた声を出してしまう。それほどの衝撃発言だったんだろうな。

それにしても、なんの予習もせずに授業を受けるなんて甚だしい。ISをなめているのか？

「ぜ、全部ですか!？」

凄い引きつった顔になってるけど……あんまり顔に出さないほうが良いんじゃないか、教師として。

「えっと、織斑くん以外で今の段階でつまずいた人ってどれくらいいますか？」

この状況で挙手する勇気がある奴がいるのかねえ？

……いないな。

どうすんだ、一夏さんよ。なんで誰も手を挙げないのって顔してるけど。

此処で動く人物はブリュンヒルデの二つ名を持つ織斑千冬。身内に対して非情を貫く彼女は容赦なく一夏を叩く。

叩かれるのはしょうがないと思う。いや、むしろ叩かれて当然だと

思う。古い電話帳と間違えて捨てたって。双子の兄で天才様がいるんだからソレに頼れよ。

出来損ないの漫才へと発展していく現状に呆れるしかないよな！。

### 3話

「代表候補生じゃないんだよ。あくまで企業のテストパイロット」

「……そう」

「ああ、ボーダーラインに届かなかったんだろっな」

「……もう……時間になるから」

「そうだな。悪いな、ばったりと出会った奴の話につき合わせて」

「別に……構わない」

「そっか。じゃ、また縁があつたらな」

実はまだ時間に余裕があるんだけど、アッチが切り上げたいなら無理強いすることなんてしないよ。

名前も知らない相手とちよつとした他愛もない会話を終えて教室に戻れば、おかしな状況にばったり。

「そう！ エリートなのですわ」

……あっ？

「本来ならわたくしや千夏さんのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも幸運なのよ。その現実をもう少し理解し

ていただけける？」

どんな現実だよ、その地獄は？

あれに割って入る気はないので真っ直ぐ席へ向かう。  
こういうのはヤジウマに徹するに限る。

「まあまあ」

改めて状況を見ると、あーっと、金髪の女子が一夏に詰め寄っていて、その間に緩和剤よろしく入り込んでいるのが千夏ってところが。楽しそうだな……周りが。

「そうか。それはラッキーだな」

「馬鹿にしていますの？」

「落ち着きなよ、セシリア」

「わたくしは落ち着いていますわ、千夏さん」

……何処がだ？

「大体、天才と呼ばれる千夏さんの弟のくせに、よくもそこまで知性の欠片もない状態でIS学園に入れましたわね」

アレだろ、男性のIS操縦者が希少だからだろ？ 考えろよ。

「俺に期待されても困るんだが」

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

その対応の何処に優しさが含まれているのかを聞きたいんだが。

……まあ、優しさの基準なんてものは人それぞれだから、とやかく言う必要はないだろうがね。

って言っている間にも話は進んでいくんだよな。話に参加している訳じゃないから関係ないけど。

どうでも良いけどそろそろ時間になるんだけど。予鈴が鳴る前に席に着くことをお勧めするよ。

「入試ってあれか？ ISを動かして戦うやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

若干会話が馬鹿っぽくなってきてんぞ。

「あれ？ 俺も倒したぞ、教官」

……あ！？ それって……アイツが強いつてことか？ まったく無

知っぽそうなアイツが！？

天才の弟も天才かい。姉といい双子の兄弟といい、ずいぶんと恵まれているな。羨ましい限りで。

「わ、わたくしと千夏さんだけだと聞きましたが？」

わたくしと千夏さんだけね……。ま、私は奮闘虚しく敗北してしまつたんだからその枠には入れない。入る気もないけどさ。

「聞き逃しただけじゃないのか？」

ほれ、もう予鈴が鳴るぞ。

「……そういえば、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者決める」

……だそうです。

教壇に立つ千冬が今思い出したように言ったことはけっこう重要な事だ。時たま抜けているのか？

「はい。織斑くんを推薦します」

……どっちだ？ 二人いるぞ。候補者になりうる者以外を挙げるなら三人いるしな。

どっちなんて言う必要はないかな？

「織斑千夏くんを推薦します」

だろうね。

「じゃあ、私は一夏くんを推薦します」

……興味本位か？ だとしたら止めておけ。本人の迷惑を考えるべきだ。

言っても所詮は他人だから、相手の心なんて知らぬ存ぜず。



「……俺!？」

うん、お前。

「他にはいないのか？ 自薦他薦は問わないぞ」

自薦他薦は問わない……か。

「納得いきませんわ!」

え、ええー？

気だるくなってきた。すんごい気だるくなってきた。どうして大人しくしてられない。

「そのような選出は認められません。大体その男がクラス代表の候補に選ばれるだなんていい恥さらしですわ!」

あくまで候補だよ。決定事項じゃない。そこを分かれよ、セシリアとやら。

心の中で突っ込みを入れている間に勝手にヒートアップしていくセシリア。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「一夏!？ 言って良い事と悪い事があるぞ!」

売り言葉に買い言葉をぶつけ合い始める一夏、セシリア。それを止めに入る千夏。

セシリアに落ち度がないみたいなの言い方だな。

「あー、先生」

その場から立ち上がって存在を示す。言い争いをしている中で気づいてもらうのは大変だよ。

「ええつと、どうしました。永音さん？」

千冬ではなく山田真耶先生が気づいてくれたか。別にどっちでも良いけど。

真耶先生の声で私にクラスの視線が集まる。子供みたいな言い争いをしていた一夏とセシリア、それを止めようとしていた千夏の視線も私に注目していた。

「私も立候補させてもらいますよ、せっかくだから」

私を見つめる千夏に一瞬視線をやって答える。

まさか、却下するってことはないよな？

## 4話

「よろしい。織斑兄弟、オルコット、永音の四名で戦い決めてもらう」

千冬によって私達が戦って代表を決めることになった。問題は四人中二人が代表の座など欲していないって事だな。一夏は選ばれた拳句にセシリアに馬鹿にされて戦う気にはなっているが、クラス代表については消極的だろう。

私もクラス代表に興味などはない。狙いはただ一つ、千夏と手合わせをしたいだけ。戦闘狂という訳じゃあない。昔に一度戦ってから再戦したいという欲求があるからだ。

「ただ一度に四人の試合が出来る程アリーナは自由には使えない。そうだな、トーナメント方式で三日後に織斑千夏対永音。一週間後に織斑一夏対オルコット。さらにそれぞれの試合で勝ち残った者同士との戦いをする」

ふーん。良い組み合わせだねえ。いきなり千夏と戦えるとは。手の内を晒す事なくいける。

まあ、手の内と言っても大したことはないんだがな。なんせ、私はしがないテストパイロットだからな。

三日後が楽しみだ。恋焦がれる私の想いは膨らんでいくばかりだぞ。

「アイツは……大丈夫なのか？ あそこまで言っておいてあの状況」

放課後となり、授業から解放された生徒達が思い思いに過ごす中、件の織斑千夏……の双子の弟である織斑一夏を眺めながらそう切実に思った。ついでに口にした。他人なのにな。

「い、意味が分からん」

……さて、割り当てられた部屋に向かうか。どうせこの場に居てもやることないんだから。

他のクラスから織斑兄弟を見に来ていた女子の壁に体を割り込ませて教室から必死の思いで出て行く。

邪魔すぎて多すぎて息がつまる。道をふさぐな。

道中人の波が左右に大きく割れていて気になったが、すぐに気にすることを止めた。波を割っていたのが千冬だったからだ。

「1025室か。同室は一体誰なのかねえ。ズカズカ踏み込んでくる奴じゃなきゃいんだけど」

人の事をあれこれ聞いてくるのって嫌だよ。どうして、そこまで他人の事を知りたがるのか？ ほっとけって話だ。

鍵を差し込んでガチャリとね。後は入るだけ。

中は学生寮にしては豪華だ。……私の部屋よりも豪華。

「良いよ。あのくらいが広すぎず狭すぎずでちょうど良いよ。若い内から贅沢していると後で後悔するんだからな」

そう言って心を落ち着かせようとする。

私の部屋がちょうど良い広さって言うけど、かねがね狭いと思って生活していたんだよな。

「とりあえず、荷解きでもしよう。そうしよう」

持ってきた生活必需品とちょっとした小物を労せずに取り出して配置していく。

自分で持ってきたんだけど少ないな、私の荷物。

ま、簡単に終わらせる事が出来たのだから良しとしよう。

「終わり！」

やる事をやったのでそこそこ値のはりそうなベッドにダイブ。

あゝあ、ふかふか。

このまま飯抜きでも良いから寝ちやおうかな？

さて、ベッドの感触を堪能したから着替えますか。授業が終わったのに何時までも制服を着てるのは息苦しい。部屋にいるんだからとつとと楽な格好に着替えますか。

先ほど配置した衣服類の中から紺色の甚平と呼ばれる和装の服を取り出す。

制服一式を脱いで下着姿になると、甚平の半ズボンを身に着ける。

半ズボンをはいたタイミングでガチャッと出入り口の方から音が聞こえてくる。

どうやら同室となる者が来たようだな。さて、一体誰か？

そう思って振り向けばアラ不思議。

……織斑一夏が突っ立っていた。

状況を瞬時に確認しよう。

私は現在下は半ズボン、上は下着だけの俗に言う半裸状態。対して目の前にいる人物は織斑一夏。紛れもない男だ。視線は一点に注がれている。

……そこまで大きい訳でもかと言って小さい訳でもない私の胸だ。  
……私の……胸だ。

「……織斑」

「お、おう!?!」

「……変態」

「わ、悪い」

自分の状況に気がついたのか急いで顔を背ける一夏。  
私も急いで甚平を着て紐を結ぶ。  
次に鞆の中から愛用のボールペンを取り出す。

「こっち向いても良いぞ」

「おう」

「さて、どうして君がこの部屋に居るのかを聞きたい」

「あーっと、俺もこの部屋なんだけど」

カチカチ。



## 5話

「シャワーの使用は一夏、君は七時から八時までの間。私が使用するときは八時から九時だ。まあ、私は基本大浴場の方に行くから関係ないかも知れないな」

現状、男女が同じ部屋で暮らす上でのルール作りの最中だ。

「部屋には無遠慮に入らないこと」

「何でだ？ 一緒の部屋で暮らすんだぞ」

「だからだよ。さつきみたいに私が着替えている間に入ってくる事があるかも知れないだろ」

異性と暮らすんだから少しは察して配慮しろ。

アレか、姉が居るからそこらへんの考えが思いつかないって事か。

「う、さっきのは本当に悪い」

土下座する勢いで頭を下げる一夏。

こっちも許したんだから謝らなくて良かったって良いのに。

「もう良いから。話を続けるぞ。君が部屋に居る時は基本、私は脱衣所で着替えをする。その時は入ってくるなよ。こっちも出来る限り君のシャワーの使用時間に被らないようにするから。で、君が部屋に居ない時は此処で着替えているかも知れないからちゃんとノックして確認するんだぞ。それとノックした後すぐに開けないで少し時間を置いて、再度ノックしてから入ってくれな。面倒だけど男女



が暮らす以上これくらいのルールが必要だから」

これくらい決めればひとまず安心出来るかな？ 一夏は私が考えた決まりに対して終始頷いているだけだったな。もしかして……理解出来ていない？

「紙に書いて何処が目立つ場所に貼っておこうか？」

「そうだな。そうしてくれると助かる」

この様子からして理解は出来ているらしいな。

食事までまだ時間があるから今のうちに書いて貼っておくかな？ 私が紙を取り出そうと鞆の中を物色していると、一夏が何か重要な事に気がついたのが変な顔をしていた。

「どうしたんだよ？ 何か追加したいルールでもあるのかな？」

「え、いや、此処ってトイレないよな」

トイレか。確かにこの部屋にはないな。それがどうしたんだ？

「各階の両端に二カ所だな」

「それって男子用はあるのか？」

そういうことか。どうだろうな？ ま、IS学園の性質からしてな  
いと思っけど。

「ないだろうねえ。その事に関しては先生に聞くしかないよ」

「最悪女子トイレを使うしかないな」

本当に最悪だな。見つければゴミ虫扱いされる。

「止めとけ。リスクが高すぎる」

同居人が人間の称号を捨てたりでもしたらもう一緒には暮らせない。追い出して路頭を彷徨わせてやれるくらいに心を鬼にすることが出来る。

チラツと持ち込んだ時計に目をやると、そろそろ夕食の時間になるうとしていた。

一夏はまだ荷解きをしていない。

「もうすぐ夕食の時間になる。手伝うから荷解きを終わらせてくれないな」

君の全てを暴いてやる……なんてな。

朝からどうしてこう……私の同居人となった一夏は周りからの視線を集めるのか？

「続流、コレ美味しいな」

「そっか」

少しは周りの視線に気づきなさいな。もしかして、気づいた上で無視しているのかな？

周りの視線は今、二人の集中している。片方は一夏。私の目の前で  
のんきに飯をかつくらっている男。一緒に部屋だからってことで食  
事の席も一緒。

もう片方は一夏の隣で爽やかな笑みで食事をしている一夏の双子の  
兄で天才さんの千夏。周りの視線に困ったように笑っている。

千夏の前、私の右隣に座っているのは不機嫌な顔をした篠ノ之箒。しののけのき  
さつき聞いたのだけど、どうやら千夏と同室のようだ。男が二人居  
るのに分けて配置する意味が分からない。

「箒、そんなに不機嫌な顔をしないでよ」

「生まれつきだ」

人が心地よく食事をしたいと言うのにコイツ等ときたら隣で面倒な  
やり取りをして。聞いていて不快なんだよな。顔を合わせないし、  
視線があつてもすぐに逸らす。全部箒なだけだねえ。

私達の方は隣と違い普通だ。一夏が話しかけてきたら私は応えるし、  
逆に私が話しかけたら、一夏も応えてくれる。とつても平和でほの  
ぼのしている。

「せ、千夏くん。隣良いかな？」

「一夏くん、隣座って良い？」

朝食を乗せたトレーを持った女子三人組みが現れ、相席を求めてく  
る。しかも、男子二人の隣を。

それを見る出遅れた女子の悔しそうに呟いているようだけど。

「永音さん、隣座るね？」

どうやら私の方にも座るらしい。千夏の近くである筈の隣に座れば良いのになと思ったが、あの雰囲気隣の隣に座りたがる者は居ないか。

「どつぞ」

返事をすれば隣に内容の少ない食事が置かれた。ハードな学園生活に反比例するかのような量だ。死ぬ気か、お前たちは！？

「うわー、千夏くん達って沢山食べるんだね」

「朝食は全ての始まりだからね。いっぱい食べないと力が出ないんだよ」

「ってか、女子ってそれだけで足りるのか？」

女子である私もそれを思った。少なすぎない？もしかして、ダイエット中？ だとしても朝は大事だよ。

「私達はねえ……」

「平気かな」

「お菓子よく食べるし」

これはきつとダイエットだな。お疲れ様でも、間食したら意味ないんじゃない？

「織斑、私はもう行くぞ」

どっちに言ったのかは分からないが、箸が食べ終わったのかトレイを持って去っていった。

そのすぐ後に千冬の脅迫が食堂に響き渡って全員が食事を急かされていた。

……私は食べ終わっていたから彼女等を尻目にのんびり片付けさせてもらった。

## 6話

「まったく分からない」

「人の席に来て言う事がそれかい、君は」

二時間目の終了と同時に一夏が風に吹かれる枯葉みたいに私の席までやってきた。これも同居人って理由からなのかねえ？

さっきの授業で使っていた教科書を持ってきてるから分からないところを教えてほしいって事なんだろうな。

「仕方ないだろ、分からないんだから。みんな良くこんなの理解出来るな」

理解するのは難しいだぞ。訳の分からない専門用語の羅列を一字一句頭に叩き込まなきゃいけないんだ。予習せずに授業を聞いたってどうしようもない。

「出来るんじゃない。出来なきゃいけないだよ、此处に入るためには。知識なしで入った君が悪い」

「う、別に入りたくて入った訳じゃないんだけどな」

「周りはそう見てくれないぞ。諦めて猛勉強をしな」

自分の意志で入った訳じゃなくてもな、後の祭り状態だから。

「頼む、続流。教えてくれ！」

頭を下げて大声で頼み込むな。周りから視線が集まってきたよ。めちゃくちゃ目立つんだよ。この状態でどう断れば良いんだ？ 断つたら私の心証が悪くなっちゃうしねえ。

仕方ないな。同室だから断ると生活し辛くなるから諦めるしかないよ。

「あー、うん、良いけど。私あんまり教えるの得意じゃないよ。それでも良いなら頑張ってみるけど？」

安全策として教えるのが得意じゃないことをアピールしておく。逃走経路確保！

「それでも俺はオツケーだ。ありがとう、続流」

今気づいたけど呼び捨てにされてる。別に良いんだけどな。ただ

「永音さん一歩進んでる」

「良いな、名前で呼ばれてる」

「出遅れてるよ、私。誰か私にチャンスと機会を」

周りの反応がねえ。最後の人は必死だな。言語は違えど同じ単語を使っているくらいに。

早く授業が始まる事を強く望む。

次の授業は真耶先生主導の下に展開されている。

真耶先生が教科書を読み進める中、一夏の方を見れば腕を組んで止

まっている。アイツ……正気か？  
アイツなりに理解しようと思ってると思いたい。

「そんなに難しく考える必要はありませんよ。そうですね、例えば皆さんはブラジャーをしていますよね」

もしかしたら、さらしを巻いている奴がいるかもな。……いないか、そんな物好き。すいません、続けてください。

「あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出るということはいないわけです。もちろん、自分に合ったサイズを選ばないと、形崩れしてしまいますが」

うん？ 止まった？

不審に思って教科書から視線を外して正面を向くと、真耶先生が顔を真っ赤にしていた。  
どうしたのかねえ？

「え、えっと、お、織斑くん達はしてませんよね。分からないですよ、この例えは」

あーっと、そういうことかい。二人の織斑が原因でこんな空気になった訳ねえ。

腕組みをして胸を隠そうとする女子達を見ると意識してるなと思うよ。この感じだと、二人の織斑が野獣みたいな設定になっちゃうな。どうでも良いけど、授業が止まってんよ。

私のツッコミが届いたかどうかは定かではないけど、千冬が咳払いをして授業再開を促してくれた。

すぐにまた中断しちゃったけどさ。



授業が終了。先生二人（そのうち一人は鬼のようなモノ）が退出すると我先にと女子達が千夏、一夏へと殺到していく。一夏も我先にと席を離れて私のところへと向かってくる。……回れ右してお帰んなさいな。

「君はアレだ。……私をどうしたいんだよ？」

「え、仲良くしたいだけだぞ」

あーそう。健全なことでもなによりで。

「ねえねえ、一夏くんさあ」

「永音さん。一夏ちゃんと仲良いね」

「質問しつもん」

元凶が私の席に来てしまったことでワラワラと女子の集団が席を取り囲んでくる。四方八方何処も見えないぞ。息苦しくなるから少し散れ。まあ、こんなのでマシな方なんだよな。千夏の方にも女子が殺到しているから。あっちも質問攻めにあっているらしいな。

「ねえねえ、一夏ちゃんと永音さんはどうして仲が良いの？」

「それは一緒の部屋だからな」

一夏が一人の女子に答えた瞬間

空間が凍結した、冗談抜きで。

「「「えーっ!?」「」」

復活と同時に音響攻撃するな。耳が痛い。

「良いな、代わって」

「永音さん、今日部屋に行っただい？」

「どれくらい進んだの、永音さん？」

どうして矛先が私に向くんだ？ 最後の質問した奴。どのくらい進んだじゃない！ 進む気なんて微塵もないよ。

……早く授業を生まれ！ お願いだから。

## 7話

「学園で専用機を用意するそうだ」

一夏のどうしようもない爆弾発言で好奇心旺盛な女子達が誘爆した後、短いはずの休憩時間が妙に長く感じられ、ようやくさつき授業が始まり解放された。

お前のせいで酷い目にあつたぞ、私は。

一夏の背中に呪詛を飛ばしていると千冬が信じられない事を言っているのが耳に入った。

織斑一夏に専用機を出す……と言うもの。

贅沢すぎやしないかい？ 労せず専用機なんて。さすが、二人しかいないISを操縦出来る男性だ。専用機持ちの並々ならぬ努力を愚弄するのかよ。

「せ、専用機！？ 一年の、この時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出てるってこと！？」

「ふざけんよなー」

教室中がざわめいているのを良い事に私は呟いた。どうせ聞こえてないだろうしな。

それにしても、アイツは周りが驚いている事と専用機を持つ事の意味を理解していないんだろっねえ。なんとなく雰囲気と専用機って単語で気づっこうよ。

「教科書六ページだよ、一夏」

呆れてモノがいえない千冬に代わって、千夏が助け舟を出している。一夏、少しは知識を入れないと馬鹿になっちゃうよ。しかも冗談抜きで。

「えっと……」現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われている  
ISですが

ISにとってもっとも重要なコアの製造技術は篠ノ之束が情報を開示しなかったせいで、現存するコアは467機と中途半端な数しかない。そしてISのコアは国家・企業・組織・機関が独占しているから、企業に所属している者しか与えられないんだよ。結論、無所属の一夏が専用機を持つなんてのは大変珍しいってことだ。まあ、データ取りの意味合いもあるだろうけどな。ちなみに私もデータ取りを目的として此処に来ているんだよ。専用機持ちは大体データ取りの為に來てるから、別に珍しい事はないけどな。

一夏が読み終わると、一人の女子が質問してきた。  
「篠ノ之束と関係があるのかと。……初日に気づけよ。いや、気づいていたけど言わなかったのかな？」  
千冬は質問に対して、逡巡することなくサラリと個人情報を漏らした。……個人情報保護法は何処に！？  
まあ、遅かれ早かれバレるだろうから今バラした方が良かったのかねえ。

有名人の身内が教室に居ると知った女子達はワラワラワラワラと筭の席へ殺到して質問攻め。

叱らなくて良いのか？ 真耶先生オロオロしてないで。

結局、この事態を無理矢理収めたのは当事者である筭自身だったよ。

「よし、授業を始めるぞ」

良し、じゃあない。火種だけ投げやがって。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

授業が終わり休憩時間になると、前の時間と同様に一夏が私の席にやってきたよ、来ましたよ。  
しかも、いらぬオマケを持参してさ。

腰に手を当ててそう言うてくるセシリアに帰ってほしいと思った私はいけないのだろうか？

「まあ、一応勝負は見えていますけど？ さすがに」

……お前のこと今嫌いだけと言っている事には納得だわな。『代表候補生』の肩書きを持つセシリアと『間抜け』で『ド素人』の一夏。普通に考えれば勝負は見えているよ。セシリアの圧倒的な勝利だ。

「つまり、現時点で専用機を持っていますの」

私も専用機持つてるけど。代表候補じゃあないけどねえ。

「へー」

へー、ってこの手の相手にその反応は良くないぞ。

「馬鹿にしていますの?」

ほれ見る。火に油を注いじやつて。

「そう言えば、じゅう続流も専用機を持っていたよな」

「君はとことん私を困らせたい訳だな」

「え、何でだ?」

「その君の態度の何でだと言いたいよ」

私に矛先が向くでしょうが! あと、そういう事ばかりを覚えていくんじゃない!

「そう言えば貴女も専用機を持っていましたわね」

……来ましたよ。

「そうだけど」

「まあ、わたくしや千夏さんとは違って企業のテストパイロットです。代表候補生と比べてもらっては困りますが」

現在進行形で比べられて困っているんだけどなー、私が。他人を不快にしている暇があるなら、代表になりなよ。そうそうなれないだらうけどねえ。

「それは申し訳ないね。高々テストパイロットの分際でクラス代表の候補に名乗り出てしまつて」

「本当ですわ。しかも、千夏さんと戦うなんて、少しは身の程を弁えたらどうですか？」

弁えているつもりで言つたんだけどな。

「おい、続流。飯食いに行こうぜ」

唐突に一夏がそんな事を言う。しかも、私の腕を掴んで無理矢理引っ張つて教室を出て行く。こんな時だけ空気を読んで行動するなよ。天然か、お前は！

## 8話

「助けてもらった事には感謝してるけどねえ。いーつーまーでー引張るのかな？」

一夏、お前は何故に腕を掴んで歩き続ける。しかも、再三の抗議を無視して。

「黙ってついて来い」

……チャラで良いよな？ もうさっきのはチャラで良いよな？  
腕を引つ張られている私は一夏の後ろを取る立ち位置だ。拳を叩き込むは容易。

そう思っているうちに目的地の食堂に着いてしまったよ。ほんの少し考えている間にチャンスをなくしちゃったな。

「続流、何食う？ 何でも食うよな？」

他人の抗議どころか食う物も聞く気ないんだな。よし、叩き込む！  
思い立ったが吉日。一夏の後頭部を力いっぱい叩く。

「いつて!？」

いつて、じゃあない。此処まで来る間にいろんな人に見られたぞ。  
多くに勘違いを与えてしまったんだぞ。これからの学園生活に支障が出たらどうすんのよ。

「まったく、人が何度も手を離せって言ったんだから離せよな」



一夏を押し退けて食券を購入する。ついでだから一夏のも購入。お前など素うどんで十分だ。

二枚の食券をカウンターに置いて阻止出来ない状態を作り出す。そもそも、一夏は自分の食券が素うどんだとは知らない……と言うより自分のものを私が購入している事を知らない。

「まあ、助けしてくれたからな。代わりに食券を買ってさっき頼んだよ」

「お、おう。悪いな」

食券を購入しようとしていた一夏を呼び止めると、少し照れたように私の後ろについた。

僅かな沈黙。

妙な視線を感じたので後ろを向くと、ニコニコと笑顔で私を見ている一夏がいた。

「はい、マグロ丼、素うどんお待ち！」

「ありがとうございます」

おばちゃんの声に私は正面を向いて笑顔で礼を言ってマグロ丼を受け取る。味噌汁とサラダがついているねえ。美味しそうだよ。

場所をあけて自分の昼食を見ると一瞬止まる。

「す、素うどん。……素うどん……だけ!？」

以外に良い反応するな、お前は。

「一夏、私からのささやかな気持ちだ。遠慮なく食べてくれ……素

うどんを」

心からのお礼だよ、一夏くん。残念ながら、さっきの引きずり回された事でプラマイゼロだけだな。本当は奢らせるつもりだったけど、助けてもらった礼はしないといえないから、間を取って素うどん。

さて、素うどんに泣いている男など無視して食べますか。

ちようどん三人、四人分空いているテーブルがあるからそこに向かう。

「頂きます」

合掌してから食事を開始する。

「置いていくなよ、続流。いなくなっってビックリしたぞ」

何故に来る、一夏さんよ。

当然のように私の隣に座る一夏。彼の目の前には私が頼んであげた素うどんと日替わり定食が鎮座していた。……コイツ、新しく頼みやがったな。

「そついやさあ」

「何だ？ 抗議なら受け付けないぞ」

「そこは良いから。ISの事教えてくれないか？ このままじゃ来週優勝でなにも出来ずに負けそつだ」

ああ、そついう事かい。

「今から学んだとしても勝ち目は薄いよ」

「そうだけどさ。やると言った以上努力しない訳にはいかないだろう」

努力ねえ。個人的には好きな言葉だよ。

「なら、君んこのお兄さんお姉さんに教えを請いなさいな。私より有意義だろう」

「俺一人だけが千冬姉に訓練してもらったら特別扱いになつて悪いだろ」

確かに。そこんこはちゃんと考えられるのな。私の迷惑は考えないのに。

「じゃあ、お兄さんにすればいいだろう」

「……千夏はいい」

急にムスつてなったな。今まで意識してるようには見えなかったけどやっぱり劣等感持つてんだねえ。仕方ないか、よほどの聖人君子かおとぼけさん以外は嫌だよな。天才つて奴はやな存在だから。次元が違つて言えば良いのかな？ 他人なら関係ないと無関心でいられるけど、それが身内だと話は違うんだ。比べられる。両親に兄弟に友達に友達の友達にクラスに教師に他人に。

「ま、良いよ。限界はあるだろうけど教え」

「ねえ。君つて噂の子でしょ？」

てあげようと思ったけどどうしようかねえ？

「はあ、たぶん」

少々気分を害されたような顔するなよ、一夏。

「代表候補生の子と勝負するって聞いたけど、ホント？」

「……そうですね」

「なら、私が教えてあげよっか？ ISについて」

はい、私要らない子認定ほぼ確定。さよなら、一夏。私は自由を手に入れたぞ。

食器を片付けようと立ち上がるつもりだったが、肩をがしっと掴まれる……一夏に。

「間に合ってますから」

良い笑顔で何を言ってるの!？

## 9話

「で、何で君が此処にいるのかな？」

第三アリーナのピットで私はさも当然のように目の前にいる一夏に問いかけた。

お前の試合は来週だろう。どうして此処にいるんだ？

「決まってるだろ、応援にきたんだよ」

何時そんな事が決まったんだ。大人しく観客席に戻りなさいな。

今日は待ちに待った千夏との対戦の日だ。

興奮していたのか、朝早く目覚めてしまった。それほどまでに待ち望んだ日。

天才織斑千夏と再戦出来る日が来るとは本当に運が良い。

ISスーツに着替えて今か今かと試合が始まるのを待っている。

はつきり言って勝てるとは思わない。全盛期の織斑千冬をも凌駕すると言われている千夏だ。しがないテストパイロットの私に勝てるなんて甘い考えはない。でも、勝ちたいと思う。

暫く一夏と他愛のない話をしているとアナウンスが室内に響く。

出番が来たな。

私は自身のIS『打直』を展開する。

「お、それが続流のISか。……あれ？ 打鉄ってやつに似てない

か？」

…… IS に関してはアホな子だと思っただけど気がつきはするんだな。

「似てるさ。打鉄のカスタムだから」

笹萩代一がトップを務める笹萩重工が造りあげた第二世代の IS。土台となったのは日本の国産 IS 打鉄でそれを重工が改造しただけと言っなんとも手抜きっぷりな専用機。代一曰く、コレを元に更なる強化を施すと。本当かと疑問に思っていたが、開発チームが組まれている事から嘘ではないらしい。見せ掛けでないのなら……だけど。

外見における打鉄と打直の違いは肩に浮いている装甲だ。打直はその肩の装甲の内側にスラスタが追加され、装甲が打鉄よりも一回り大きい。打鉄に比べて機動力が一割増している……らしい。

そんな強いかどうかも分からないような打直を装着している私はピットゲートにゆっくりと進む。

「一夏、この戦いをちゃんと見ておけよな。勝敗はどうあれ少しは役に立つだろうから」

「おう。続流も頑張れよ」

私が勝つことを疑わない顔をしている。

期待には応えられないな、この試合では特に。

フィールド内は二人しかいない。織斑千夏と私こと永音統流。アリーナ内には一組全員の視線が注がれているが、そんなことは知ったことではない。此処には私と千夏しかいない。

「そう言えば、あの頃戦ったきりで今の今まで合ってなかったよね」  
爽やかな笑顔で戦闘前の会話を始める千夏。  
私は今すぐにも戦いを始めたいんだけど。

「そうだねえ。あの時以来だよ、本当に」

右手に持ったマシンガンは今すぐにもその嫌味のまったくない笑顔に向けたい。

IS『白銀』<sup>はくぎん</sup>。銀と白のISで私が負けた時のISとは違う。天使の翼をイメージした一対の背部スラスタにシャープな装甲。まるで天使のようだ。右手には西洋の巨大な両刃剣を持っている。どうやら剣の先端が開いて射撃武器にもなるらしい。形状からして盾にもなると考えられる。

「じゃあ、お互いに頑張ろう」

やっと試合を始めるのか。すでに試合開始の鐘がなって三分は経っているぞ。

まあ良い、試合開始だ。

先手必勝とばかりにマシンガンの引き金を引く。  
牽制など微塵も考えずに放たれた弾丸を千夏は圧倒的な機動力で回

避していく。  
やっぱりただ弾を撒き散らしても無駄だ。

攻撃を中断すると今度は千夏が行動を起こした。  
大剣を射撃戦モードにした千夏が私に向けてビームを発射する。

「よりによってビームか！」

実弾に比べてビームは弾速が速く威力も比較にならないほど高い。  
しかし、撃てば撃つほどエネルギーを消費していくだろう。しかも  
この威力なら十撃てるかどうかだ。もしかしたらそれよりも少ない  
かも知らない。

まずは回避に専念した方が良い。息切れを狙う。

相手の砲口と腕の動きに注目して回避を繰り返していく。

一発、二発、三発と。

回避に専念しすぎて接近を許す訳にはいかないのばら撒く程度に  
マシンガン撃つ。

ビームを何度も避けていると遂に発射されることはなくなった。ど  
うやら七発が限界のようだ。予想より少なくて何よりだ。

次は此方が攻める番だな。

近接戦闘用のブレードをコールしていざ斬りかかろうとした時、嫌  
なものを見た。

千夏の持つ大剣の鏢に近い刃の部分がスライドして、カートリッジ  
のような物が吐き出される。千夏はそこに新しくコールしたカート  
リッジを装填した。

私が無理矢理に機動を変えると、先ほどまでいた場所をビームが通  
りすぎていった。



カートリッジが幾つあるか分からないので、回避に専念してエネルギー切れを誘うことが出来なくなった。

千夏がビームを撃つとその場から離れ私に接近してきた。

距離を詰められたくはないが、スピードが負けているので逃げ切ることは出来ない。

マシンガンで千夏を狙い撃つが、大剣の腹で防ぎながらも接近してくる。

多少本体に命中させられたが、止めるには至らず近接戦闘を許してしまう。

ブレード同士の打ち合い。私は銃も剣も出来るが得物が悪い。質量のある大剣を受け止めきれぬ訳もなく、接近戦は押されっぱなしだ。吹き飛ばされた瞬間に距離が開くのでマシンガンを使いダメージを与えていくが、距離を詰めるスピードも速いために有効打にはならない。

私のシールドエネルギーはあとビーム二発食らえば空になる。その焦りは相手が射撃戦モードに移行したのを視認する事を遅らせてしまう。それが回避運動をも遅らせる。

#### 衝撃。

左腕に命中したのを確認出来たのは左腕が千切れるような痛みが走った時だった。

左に構えていたブレードは左腕の装甲もろ共吹き飛ばされた。

右腕のマシンガンも弾切れ。

「いくら努力しても……」

マシンガンを手放す。

「天才には勝てないか」

ふつつつと湧き上がる想い。

「いや、続流さんも強かったよ」

真剣な表情を崩して褒めてくる。

喜ぶ事は出来ない。相手は最初から勝てるものと思っていたのを知ったからだ。

『強かった』は過去形の言い方だ。つまり彼の中ではもう戦いは自分の勝利で終わっているんだ。

天才って奴はこれだから嫌いだ。

人が必死こいて一の事を覚えている間に十を知る。

こつちが幾ら努力しようとも涼しげな顔で一蹴する。

「ふざけるな！」

右の袖部分の装甲からナイフが飛び出す。

左手にはハイパーセンサーも無力に出来る煙幕を広域散布する爆弾。爆弾を投げると爆発してあたり一面の視界を瞬時に奪う。

更に二つ追加して煙幕の密度を上げる。

煙に覆われ何も見えない中、私の視界には煙幕に目を細めて集中している千夏がはっきりと見える。

私にはこの煙幕の中でもしっかりと相手を見ることの出来る眼がある。

ナイフを構えて千夏を斬りつける。そしてすぐに離れ、位置を変えて更に攻撃を仕掛けていく。

「そうやって天才って奴は何でも出来る事が当たり前で」  
ナイフが相手の装甲を抉る。

「意識下にしろ無意識下にしろ他人を嘲笑って」  
見えない中で振るわれる大剣を回避。

「努力を蔑ろにして」

背中から斬りかかる。

「馬鹿にするな！」

「そんな考えは続流、君自身を痛めつけるだけだよ！」  
ナイフで斬られながらも言葉を発する千夏。

「怒りや憎悪に囚われたら心を疲弊させて君自身を殺すだけだ！  
そんな悲しいことは止めなよ！」

「さすがだな。そうやって綺麗事言って！」

「真っ直ぐに言葉を捉えなきゃ、なんでもそう言う風に聞こえてしまっただよ！ もう怒りに身を任せないで！」

この聖人君子のような男に真上からナイフを突き出す。  
それは真っ直ぐ彼の体を貫こうとして 通り過ぎた。

「!?!?」

気がついたら目の前に大剣の砲口を構えた千夏がいた。

「俺が君の心も守ってあげるよ。だから君に不必要なその黒い感情を捨てるんだ」

先端から今まで見た中で一番大きく高密度のビームが放たれ、私を飲み込んだ。

## 9話

「人間には黒い感情も必要だったの」

保健室のベッドの上で誰に聞かせる訳もなく呟く。

どうしてこんな所にいるのかは理解している。

負けたからだ、あの天才に。

起きぬけは最悪だった。

目覚めて初めて目にしたのはこの部屋の無機質な天井ではなく、私の顔を覗きこんでいる千夏だった。

改めてアイツの顔をじっくり見たのだが、女子生徒が騒ぎたてるのが分かる整った顔をしていた。私からしてみれば整いすぎて気持ち悪いくらいに。

少し目線を逸らせば、千夏の後ろに一夏がいた。本人は意識しているのかは知らないが不機嫌そうな顔をしている。

私が千夏に負けたのがそんなに気に食わないのかい？  
体を起して千夏を見ると笑顔が浮かべてくる。

「よかった。何処か痛いところはないかい？」

そうだな、しいて言えば眼が痛い……お前の顔がアップで映って。

「特にない」

とっとと話を切り上げて帰ってくれ。

「ごめんね。俺が君の心に深い傷をつけたんだ。それに気づかなかつたなんて」

「知った風に言うのは止めるよ」

「確かに君からしてみれば知った風に聞こえるかもしれない。でも、君の心からの悲鳴は確かに聞こえた。俺は君の心を救いたい」

「なら、今すぐに私の前から消えてくれないかい？ そうすれば悲鳴なんて聞こえないだろう？」

もう顔を合わせて会話するのを億劫だ。コイツの吐き出す言葉の一つ一つが癪に障る。

「それは、君の声を聞こえないふりをするだけでなんの解決にもならないよ。それじゃあ君は救われない」

「お前の勝手な責任感で私に構うな」

「責任感じゃない。ただ、純粹に君を救いたいんだ」

「出てけよ。これ以上話しても無駄だ」

私の言葉に千夏は反論しようとして止めた。きっと今の私に何を言っても無駄だと理解したのだろう。

立ち上がって部屋から出て行くこととする。

「責任感とか利害がどうかじゃないんだ。俺は君にまやさしの悪意に囚われないでほしいだけなんだ」

最後に理解の出来ないことを言ってから出て行った。

まやかしの悪意？ 自分が相手に悪意を抱かれる事はないって言い  
たいのか、アレは？

ともあれ、ようやく落ち着く事が出来る。

「大丈夫か、続流!？」

……出来ると思っただけだな。

先ほどの平行線のやりとりですっかり忘れていたよ、一夏の事を。

「さっき大丈夫って言ったはずだけだな」

「言っていないぞ」

よく考えると言っていないな。だとしたら失礼。

先ほどまで双子の兄が居た場所に今度は弟がやってきた。兄と同じ  
道に行くか。

「で、少しは何とかなりそうか？」

「え!？」

心底分かっていない顔で驚く一夏。コイツは私が試合前に言ったこ  
とを忘れたんじゃないのか？

「私の試合を見て少しはISでの戦いがどういうものか分かったの  
か？」

呆れ混じりに言う。

これで何の話だって言われたらもう知らない。勝手にやって勝手に負けてくれ。

「おう、速かったな」

小学生じゃあないんだからもう少し知的な感想が聞きたかったねえ。仕方ないか、まだ基礎知識を取りこんでいる最中なんだから。

一週間であの量を覚え切れるとは思っていない。

「そうだな、速かったな。……それで？」

「それで？ ……えっと、凄かった？」

「凄かったな。……それで？」

「えーっと……」

私の問いかけに言葉を詰まらせる一夏。お仕置きはこれくらいで良いかな。

「とりあえず、ISでの戦闘はあんな感じだよ。一例にしか過ぎないが、これから戦う事を考えると無駄じゃあない」

オルコットの使用するISはブルーティアーズと呼ばれる自立機動兵器を搭載した射撃型のISだと聞いている。それ以外の情報を私は持っていない。オルコットの戦闘スタイルについても私は情報を持っていない。乱射型なのか、狙撃型なのか、何処まで近接戦闘が可能なのか。

とりあえず、一夏の事を見下している事から試合中に慢心による油



断があるだろう。試合まであんなキヤラを突き通せばの話だがねえ。まあ、今私がやるべきことはこんな簡素な部屋からおさらばして自室に戻るのかな。

ベッドから降りようとすると一夏が背中を向けてしゃがみ出した。靴紐でも解けていたのか？

「何をしているんだよ」

「いや、まだ体を動かすのが辛いんじゃないかと思って」

コイツ……。

私は呆れて言葉も浮かんでこないので動作で一夏に思いを伝える事にした。

背中を思いつきり蹴るといふ動作で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0563ba/>

---

IS 永音さんは苦勞して

2012年1月15日00時18分発行